

チンゲンサイ（高原）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	○～◎—— （5日間隔で1 a 毎播種）											
主な作業	は定収 種 植 穫											

チンゲンサイ アブラナ科、原産地：中国華中地方

作物名 チンゲンサイ

学 名 Brassica campestris var. chinensis.

作 型 高原

(3) 所得率 45%

(4) 経営規模（施設面積） 20 a

（家族労働力2人の場合）

技術体系

1 作型の特徴

平坦地が高温で栽培不可能となる時期に、高冷地の冷涼な気候を利用して、3月下旬～9月にまき、5月中旬～12月中旬に収穫する作型である。

2 適応地域

標高500m以上の高原地域

3 栽培条件

(1) 温度

耐暑性は弱く、特に高温には敏感に反応し、21～22℃を越えると生育は衰え、軟腐病、その他の病害が発生しやすくなる。

(2) 土壌条件

有機質の多い肥沃な砂壤土でpH6～6.5が望ましい。

また、乾燥には極めて弱く、生育初期に乾燥すると葉の分化・伸長が抑えられ収量が激減する。

4 施設装備

連棟ハウス かん水施設

5 経営目標

(1) 収量（一作） 4 t / 10 a

(2) 投下労働時間 300時間 / 10 a

栽培技術

1 品種と特性

早まきでは抽だいしにくい品種、夏季には高温になるため、病害に強い品種を、秋まきでは低温下での伸長がよい品種を選択する必要がある。

「夏賞味」

草姿は立性で、葉はやや細目の長円形で厚みがある。また、夏の栽培で問題となる節間伸長がなく、揃いが良いので、上物が多くなる。

抽だいの心配される時期には適応しない。

「青帝」

幼苗時より生育旺盛、揃いが良く早生で強健。晩抽のため周年栽培しやすい。特にとう立ちが遅く、低温下での生育も良い。

草姿は立性で株もとの張りがよく、葉柄は広幅で青みが強いいため荷姿がよく多収である。

「四季三昧」

草姿は立性で、葉は光沢のある鮮緑色で楕円形である。葉柄は長めの広幅で、日持ちがよい。

節間伸長がなく、高温多湿期の適合性が強い。晩抽性で低温伸長性にも優れる。

2 育苗

育苗用の単棟ハウスを設置し、サイドは防虫網を張る。

(1) 播種

専用移植機での定植となるため、コーティング種

子を利用し、セル育苗をする。セル苗専用土を使用し、土詰め・播種機を活用して実施する。

(2) 育苗管理

育苗温度は15～20℃とし、最低夜温が13℃以下、日中は25℃以上にならないよう管理し、ガッチリとした健苗に仕上げる。

育苗日数は12～15日前後で、本葉3～4枚程度の苗を定植する。

3 本圃の準備

(1) 定植準備

高温期に軟腐病、その他病害の発生が多くなるので、風通しが良く、有機質の多い肥沃な圃場を選ぶ。また、ネコブ病予防のためアブラナ科野菜との連作を避ける。

定植の1ヶ月程前に粗大有機物主体の完熟堆肥を10a当たり2t投入し、石灰資材により土壌pHの調整を行っておく。

ハウスサイドには、防虫網の設置を行う。

(2) 施肥

土壌分析に応じた施肥設計とする。

施肥量 (Kg/10a)

	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	
元肥	18	15	15	
全量	18	15	15	

基肥は、定植の7日ほど前に全面施用し、深耕しておく。

(3) 栽植密度

畦幅120cm、条間15株間10cm、7条植え

4 定植

耕起・鎮圧後、専用移植機による移植を行う。

5 定植後の管理

(1) かん水

頭上かん水を利用し、移植前後に十分かん水を行う。その後はほ場条件に応じて5～7間隔で灌水を行い、収穫の7日ほど前からは灌水を行わない。

(2) 遮光

夏期の高温期には寒冷紗により30%程度の遮光を行う。

6 収穫

収穫は、M規格(60～80g)が中心階級となるような段階で行う。



7 調整

下葉をはずし、FGフィルムに詰めて出荷する。